和歌山大学名誉教授・関西学院大学教授 吉村典久氏 弔辞

1991年の4月。加護野先生の研究室にて私は、経営学を学ぶものとしての第一歩を踏み出しました。それ以来、研究者・教育者としての道を歩む上で、先生からは、本当に多くのご指導を頂きました。

私と先生の出会いは、先生のお書きになった、この『企業のパラダイム変革』でした。大学3年生のことでした。学部のゼミナールでの報告のために、書店にて偶然、手に取ったのが、この本でした。正直な所、最初は報告のためだけに読み始めましたが、スグに、「面白い」、企業活動の分析というものはこれほど「生き生き」としたもののなのか。と、一気に読み進めたことを鮮明に覚えております。

キチンと内容を理解出来ていたかどうかは、定かではありません。しかし、私の人生を変えた一冊であることは間違いありません。この本を読むまでの私の大学生活は、家業を継ぐまでのモラトリアムでしかなく、どこかに就職して、数年働いて、家業を継ぐ。それしか頭がありませんでした。しかし、それを変えてくれたのが、先生のお書きになった、この本でした。「経営学」をより深く、学んでみたい、との思いがスグに湧き上がり、大学院進学を真剣に考えることになりました。

大学院で学ぶなら、加護野先生の元で。念願叶って、先生の研究室で学び始めることが出来ました。ゼミナールなどで先生から学ばせて頂くだけではなく、論文と一緒に書かせて頂いたり、教科書を一緒に編ませて頂いたり。

先生と初めて共著論文を書かせて頂いたときのことは、ハッキリと覚えております。私の作業が全く進まず、締切間近となっても、完成にはほど遠い状況でした。学外での仕事が終わられた加護野先生にお手伝いいただき、なんとか形になったのが深夜1時あるいは2時頃でした。先生が「よっしゃ、これでいこか」とおっしゃった、その時、なぜか、理由は分かりませんが、PCがダウンしてしまいました。そのため、相当にさかのぼって論文を書き直す羽目となりましたが、その時に先生は一言、「吉村君、とりあえず、一杯、コーヒー飲もう」と笑いながらおっしゃってくださいました。そもそも、私の作業が遅れに遅れていたことが問題だったのですが、あの時の、先生の本当にやさしいお心遣いは、私の心に深く刻まれております。先生、あのときは、本当に申し訳ありませんでした。また、ありがとうございました。

先生とはまた、社会人の方々を対象とした研修の場でも多くの時間を一緒にすごさせていただきました。こうした場でも、私は本当に多くのことを学ばせていただきました。先生からの学びをあげていけばキリがございませんが、私の中での最大の学びは「問う」ことの重要性、特に、世の中で「常識的」とされていることに、あえて「問う」ことの重要性でありました。そうした研修の場などでも、先生はしばしば、「その手の話、流行っていますが、

それは、本当に、あなたの会社にとっての経営上の課題、問題ですか？」「それは、本当に問うに値しますか？」「問いから答えにかけての筋道、それは、本当に筋が通ってますか？」「違う筋はないですか？」「なんか、お行儀が良すぎる話ではないですか？」「それで、結局、その話、ビジネスマンとして、腑に落ちますか、腹落ちしますか？」。柔らかい口調で、ユーモアを交えながら、しかし、徹底的に問い続ける。これが加護野先生の流儀でした。ときに「エッ」となるような、「ちゃぶ台返し」となる問いもありました。しかし、それらの「問い」のいずれも、じっくりと考え直すと、「なるほど」と腹落ちする問いでありました。

私はこの10月から、神戸大学でお世話になることとなっております。加護野先生は経営学を「「よいこと」を「上手に成し遂げる」方法を考える学問である」と定義され、また、組織の経営に関わる者が持つべき精神として3つの精神、「市民精神」「企業精神」「営利精神」を強く主張されてきました。こうした先生のお考えを引き継ぎ、そしてさらに深掘りをしていく。これが、私にとっての使命であると認識しております。

至らぬ点多々あるかと存じますが、先生から学んだことを胸に刻み、微力ながらも、経営学研究の発展、そして次世代の研究者・実務家育成に貢献できるよう、精進してまいります。

先生、長い間、本当にありがとうございました。そして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。先生の残してくださったものを大切に、これからも歩んでまいります。どうか安らかにお眠りください。

先生、本当にありがとうございました。